

「空性思想の形成」研究序説

森 山 清 徹

一、空の表現とその意義

二、「自性の無」と「無の自性」

——*abhavasvabhava* について——

本論文の目的は初期大乘仏教における空性思想を究明することにある。そこにおいて明らかにしようとすることは最初の般若経（八千頌般若の原型）から『一万八千頌般若』『二万五千頌般若』へと増広発展した般若経の変遷において、それと伴って、空性思想がいかに発展したかを跡付けようとする。

現存八千頌般若の梵本と漢訳の小品系般若といわれる諸本とを比較検討すると現存梵本は十世紀の施護訳『仏母出生三法藏般若経』と最もよく対応することが知られ『梵本』には古訳のいわゆる支婁迦讖訳『道行般若経』、支謙訳『大明度無極経』、羅什訳『小品般若経』などには見られない新しい要素が導入され整備されている事実を随所に見い出すことができる。この新しい要素を取り除いたものを仮にここで「般若経の原型」と呼ぶことにする。ただし、これは梶芳光運博士の主張された『原始般若経』いわゆる『道行般若経』の道行品第一の最初三分の一に

相当する、^①という意味ではなく、全体の形態としては現存梵本の如く三十二章までの完成を見たものを指す。

一、空の表現とその意義

空 (*śūnya*) とは、なにもものかにとって、なにもものが欠けている状態を意味する。

ayaṁ griho ghaṭena śūnyah

とは「この家はツボを欠いている」「この家にはツボがなく」という意味であり *śūnya* は *instrumental* 支配である。

「AはBを欠いている」という端的な例を見てみると、

yad yatra na bhavati tat tena śūnyam.^②

あるもの (B) が、あるところ (A) に存在しない。そのところ (A) はそれ (B) を欠いている。

ここでAとBが、家とツボのように別個のものであるとき「AはBを欠いている」という事柄は、AにおいてBが存在するか、存在しないかを確認すれば、それが正しい主張であるか、誤りであるかは容易に決定される。ところが、AとBの関係それ自身が問題となる場合、すなわちAが *rūpa* (色) であり、Bが *rūpasvabhāva* (色の自性) であるとき「AはBを欠いている」ことは、家とツボの場合のようには容易に確かめ得ないし、そのことを端緒として主に中観学派などが取り上げている *svabhāva* (自性) を認めるか、認めないかという論議へと問題が展開する。

そこで、まず空 (*śūnya*) の説明を手掛かりに *śūnya* の意味を究明する。その基礎作業として「般若経の原型」と『一万八千頌般若』『二万五千頌般若』に現われる *śūnya* の表現を比較検討する。

空 (sunya) は色 (rupa) をはじめとする五蘊すべてについて、さらには十二処、十八界、すべてのもの（一切法）についていわれるのであるが、いまは主に rupa を代表として例示する。

(一) 「般若経の原型」に現われる空 (sunya) の表現

古訳の小品系諸本において、もとく「空」という表現が多用されているわけではないし、また「般若経の原型」と称しても、支婁迦讖訳と羅什訳には二百数十年の隔たりがあるので、当然底本の異同は考えられる。したがって、より厳密には支婁迦讖訳と羅什訳にも一線を画さねばならないであろう。さらに古訳のものに存在しても、逆に現存梵本に存在しないものもあり「般若経の原型」の実体を明らかにすることは容易ではない。しかし、般若経の歴史的発展を研究の目的とする場合には、現存梵本と古訳のものとの相違に常に注意を払い、できる限り梵本に認められる増広とそうでないものとの取捨選択という文献的操作は怠ってはならないと思われる。その立場から、明らかな現存梵本の増広と思われるものは範圍外とし、それを含まないものを、ここに一応「般若経の原型」として示す。

最初、空 (sunya) はむしろ否定されている。

もし色は空である (rupaṇ śūnyam) と実践するならば菩薩は相 (nimitta) を実践しているのである。……もし色は空であると実践しなば (na rupaṇ śūnyam iti carati) ならば、そのように実践している菩薩大士は般若ハラミツを実践しているのである。^③

空性 (śūnyatā) に立脚している菩薩大士は般若ハラミツに立脚すべきである。……色は常である、無常であるど立脚してはならない。色は楽である、苦であるど立脚してはならない。色は空である、不空である (rupaṇ śūnyam aśūnyam) と立脚してはならない。^④

色は空であるというのが執着である (rūpaṃ śūnyam iti saṅgaḥ)^⑤

弥勒菩薩成阿耨多羅三藐三菩提時。説般若波羅蜜云。不説色空。不説受想行識空。^⑥

後に至って「一切法空 (sarvadharmāḥ śūnyāḥ)」^⑦「菩薩大士はあらゆるものを空性という観点から (śūnyatā-tas) 觀察する」と説明される。「空」に関する限り經典の構成は「色は空であると実践しながら」ことから「色は空であると觀察しなければならぬ (rūpaṃ śūnyam iti pratyavekṣitavyam)」^⑧という方向へ進んで行く。「空」の説明が、肯定、否定いずれにせよ、rūpaṃ śūnyam (色は空である) という表現に尽きる。^⑩

また「自性」に関しては asvabhāva (無自性)^⑪ ということばはほとんど見られない。梵本に「色が自性をもたない故に (asvabhāvatvāt, asvabhāvatayā)」という理由句が述べられていても、古訳の小品系般若にはそれに対応するものが存在しないことがしばしばある。^⑫

「色は色の自性を離れている (rūpaṃ virahitān rūpasvabhāvena)」^⑬ という一方は、その最初に見い出すことがきる。

「般若經の原型」には「自性空 (svabhāvena śūnya)」という表現はなく「自性」に関する説明と「空」とは並列しており「自性」と「空」とが融合され、直接「自性」の概念によって「空 (śūnya)」は表現されていない。

(二) 『一万八千頌般若』『二万五千頌般若』の「空」の表現

「般若經の原型」に於て、単に〈rūpaṃ śūnyam〉〈sarvadharmāḥ śūnyāḥ〉とあったものから、以下の表現に変わるといってよい。

rūpaṃ śūnyam rūpasvabhāvena^⑭

rūpaṁ rūpeṇa śūnyam¹⁵⁾

rūpaṁ rūpatvena śūnyam¹⁶⁾

rūpaṁ prakṛtiśūnyam¹⁷⁾

dharmaṁ svabhāvena śūnyāḥ¹⁸⁾

sarvadharmāḥ svabhāvasūnyāḥ¹⁹⁾

sarvadharmāḥ prakṛtiśūnyāḥ²⁰⁾

svaśakṣaśūnyo dharmāḥ²¹⁾

nāmasvabhāvo nāmasvabhāvena śūnyāḥ²²⁾

prajñāpāramitā svabhāvena śūnyā²³⁾

śūnyatā じゆじゆた²⁴⁾

rūpameva śūnyatā śūnyataiva rūpaṁ²⁵⁾

rūpaṁ prakṛtiśūnyatāṁ²⁶⁾

rūpaṁ eva prakṛtiśūnyatā prakṛtiśūnyataiva rūpaṁ²⁷⁾

parinirvāṇaṁ yaduta atyantaśūnyatā²⁸⁾

じゆじゆた 自性 (svabhāva, pakṛti) の概念が導入されて「空」が表現されているところに特色がある。

「般若經の原型」に於いて rūpaṁ śūnyam (色は空である) と漠然と表現されていたものが、ここに至って「色」が何を欠くのかといえは、 「自性」を欠くのであると具体的なことを知るのである。

svabhāvasūnya (raṁ bśhin gyis ston pa, no bo űid kyis ston) た じゆたじゆたな svabhāvena śūnya

である。

ちなみに、竜樹の著作の中から「空」の表現を拾ってみると、

no bo ñid kyis ston⁽²⁷⁾

ran bshin gyis ni ston pa yin⁽²⁸⁾

mig de ran bdag ñid kyis ston de ni gshan bdag ñid kyis ston⁽²⁹⁾

gzugs ni ran gi no bos ston pa yin no // gshan gyi bdag ñid kyis kyan ston pa yin⁽³⁰⁾

dhos po thams cad ran bshin gyis / ston pa yin pa⁽³¹⁾

このように、最初 rūpañ śūnyañ であるが、rūpañ rūpasvabhāvena śūnyañ という表現に変化して、定着したことを物語っている。

さらに、rūpañ śūnyañ から rūpañ rūrasvabhāvena śūnyañ あるいは rūpañ rūpeṇa śūnyañ へと変化することは、単なる表現の相違にすぎないものか、それとも「空」の思想内容に於て、進歩が見られるのかという点を検討してみよう。

「色が色の自性を欠く (rūpañ rūpasvabhāvena śūnyañ)」とはどういうことなのか。

最初に「この家 (A) はツボ (B) を欠いている」という例を見た。そこでは A ≠ B であるから、A が B を欠くという事柄は、A における B の存在すること、あるいは存在しないことを確認すれば、その是非は決定される。しかし、いま問題とするように A = B すなわち「A は A の自性を欠いている (rūpañ rūpasvabhāvena śūnyañ)」
「A は A を欠いている (rūpañ rūpeṇa śūnyañ)」という命題である。

「A は A の自性を欠いている」と述べたあと「それは、なぜであるか」「それはその本性である (prakṛitirasyai-

śa) すなわち、空性によって (śūnyatayā) 色は空なのではない。……色は空性 (rūpameva śūnyatā) である、空性こそ色である (śūnyataiva rūpaṁ)」^{③4}

一方「AはAを欠いている」については、『二万五千頌般若』は二十空を説明する中で、この形で空であることを示し、つづいて「それはなぜであるか、それはその本性である (prakṛitasyaiśa ; deḥi raṇ bśnin de yin paḥi phyir)」とする。また、それは rūpameva śūnyatā śūnyataiva rūpaṁ などと表現されている。^{③5}

これより察するならば rūpaṁ rūpasvabhāvena śūnyaiṁ * rūpaṁ rūpeṇa śūnyaiṁ * 共に prakṛitasyaiśa が理由句として述べられていたから、ゆがに両者とも rūpameva śūnyatā śūnyataiva rūpaṁ と換言されているから、それらは同じ内容を示すと考えてよいと思われる。

また svabhāvena は from natural disposition, by nature, naturally, by oneself, spontaneously などという副詞的な意味であるから、それは「色は色それ自体として空である」「色は本来的に空である」と解釈することになる。^{③7}

それはまた、自相空 (svakṣaṇaśūnyatā) の理由を rūpaṁ rūpeṇa śūnyaiṁ などとする。③「Aはそれ自体として遠離している (svabhāvena vivikta) それ自体として空である (svabhāvena śūnya) それらは、声聞たちや、縁覚たちや、諸仏世尊たちがなしたことはならぬ (na kṛtaḥ)」^{③8}

ゆがに、自性空 (svabhāvaśūnyatā) を説明して「実に、自性とは顛倒のなす本性である (svabhāvo hi prakṛtirviparitatā) 本性にあって本性は、それ自体として空性である (tasya yā taya śūnyatā) 空性は知識がなつたことではないし、見ることがなしたことはなす (na sā jñānena darśanena ca kṛtā ; de la ston pa ṇid gaṇ yin pa de ni še pas ma byas / mñon bas ma byas) それは、なせでもあるか、それはその本性でもある。③」

また他性空 (parabhavaśūnyatā) を説明して「如来たちが世に現われようと、現われまいと諸の存在のまなに立脚しているその法性 (dharmatā) 法の安定性 (dharmaśāntitā) 乃至、實際 (bhūtakoti) は、それにとってそれは、それ自体として空性である。」とあることから、「色は本来的に空である」「それ自体として空である」ということが確認されよう。

「色は空である」ということが色本来のことではなければ、色と空性との全同、すなわち「空性より別に色があるのではなう (nānyatra śūnyatāya rūpaṃ) 色より別に空性があるのではなう (nānyatra rūpācchūnyatā) 色こそ空性であり、空性こそ色である」^④は考えない。単に rūpaṃ śūnyam ではなう rūpaṃ rūpasvabhāvena (or rūpeṇa) śūnyam とするのみに「色即是空 (性) ・空 (性) 即是色」という色と空性との全同へと導入し得る根拠となると考えられる。

また śūnya (空) は形容詞であり、それは rūpa (色) の存在の様相・仕方を示すものであるといえよう。したがって śūnya (空) に対して aśūnya (不空) ともいえる。^⑤

一方、śūnya に -tā suffix のついた śūnyatā (空性) は rūpa のあり方を示すにとどまらず rūpameva śūnyatā śūnyatāya rūpaṃ とあるように rūpa (色) それ自体である。「色即是空、空即是色」の「空」は śūnya ではなう śūnyatā である。^⑥

この点に śūnya と śūnyatā の内容の基本的な相違があらうし śūnyatā (空性) が、単なる「無」ではない所以も、この点にあると思われる。

「般若経の原型」における rūpaṃ śūnyam から『一万八千頌般若』『二万五千頌般若』の rūpaṃ rūpasvabhāvena (or rūpeṇa) śūnyam へと変化したことは「色即是空 (性) ・空 (性) 即是色」という「色」に「空性」

との全同を断言する論理的根拠を明確にし、そして「色は空である」とは「色は色の自性を欠いている」ことであり「色はそれ自体として空である、色は本来的に空である」ということを知らしめるのである。

A=Asīdasāhasrikā prajñāpāramitā ed. by U. Wogihara

Ad-I=Asīdaśasāhasrikā p- (ch 55 to 70) ed. by E. Conze

Ad-II=Asīdaśasāhasrikā p- (ch 70 to 82) ed. by E. Conze

Ad-Tib=Tibetan Ad 北京版「西藏大蔵経」Vol 20. No. 732

Pv=Pañcaviṃśatisāhasrikā p- ed. by N. Dutt

Pv-Tib=Tibetan Pv 北京版「西藏大蔵経」Vol 18. No. 731

Ś=Śatasāhasrikā p- ed. by P. Ghosa

- ① 梶芳光運『原始般若経の研究』本論第五篇。
- ② 菩薩地 ed. Wogihara 47p.『中辺論』Nagao Būtsya 18p.
- ③ A. 57p 15~, 58p 17『道行』大・八・四二六・c、設空_二色行_一為_二行想_一為_二不行_一般若波羅蜜_二不_レ空_三色行_一『小品』大・八・五三八・a、若空_二色行_一為_二行相_一。……不_レ行_二色空_一。……是名_二行_一般若波羅蜜_一。
- ④ A. 138p 10~, 141p 23~『道行』大・八・四二九・b 空・不空の説明はない。『小品』大・八・五四〇・b、於_二大乘_一以_二空法_一住_二般若波羅蜜_一。……不_レ應_二住_一色若空若不空_一。
- ⑤ A. 415p 18~『道行』(大・八・四四二・b)知_二色空_一者。是曰_レ為_レ著。『小品』(大・八・五五一・c~五五二・a)分別色空_一。即名為_レ著。
- ⑥ 『小品』大・八・五五二・c『道行』(大・八・四四三・c)不_レ空_二色説_一般若波羅蜜_一 A. 436p には不_レ説_二色空_一の相当文なし。
- ⑦ A. 566p 1~『小品』五五八・c、他に五五七・a・五六一・c・五六三・b・五七一・c・五七六・b・c。
- ⑧ A. 852p 3『小品』五七六・d 觀_二一切法空_一。
- ⑨ A. 749p 13『小品』五六八・c 應_レ觀_二色空_一。

- ⑩ 空性 (śūnyatā) にひらけりて rūpasya śūnyatā なるを表明せり。(A. 602p. 26『廻行』四五一の『小品』五六一の)。(A. 735p. 16『廻行』四五七の『小品』五六七の)。
- ⑪ niḥsvabhāva なるを云ふ。
- ⑫ (A. 405p. 18『廻行』四四一の『小品』五五一の) (A. 538p. 6, 25『廻行』四四九の『小品』五五七の) (A. 736p. 20『廻行』四五七の『小品』五六七の)。
- ⑬ A. 54p. 28『廻行』四二六の『小品』五三八^a。
- ⑭ Pv. 138p. 2『大品』一三六の『放光』15の『光讚』一七〇の、他に Pv 250, -1 (nāma)。
- ⑮ Pv, 191, 226, 240, 248, 258p. Ad-I 39p.
- ⑯ Pv. 128, 155p.
- ⑰ Pv. 253p. 18, 263p. 8.
- ⑱ Ad-II 73p. 8, 113p.
- ⑲ Ad-I 114p. 4.
- ⑳ Pv. 253p. 20 Ad-II 74, 77, 81p.
- ㉑ Ad-I 187p. 5.
- ㉒ Pv. 228p. 10 同様に 229p. 7.
- ㉓ Ad-I 22p.
- ㉔ 「顯觀」に於て rūpasya śūnyatā.
- ㉕ Pv. 38p. 6, 46p. 3, 128p. 11, 141p. 2, 155p. 15.
- ㉖ Pv. 173p. 14.
- ㉗ Ad-II 81p. 6.
- ㉘ Ad-II 73p.
- ㉙ 『山口益仏教学文集上』龍樹造七十空性偈に対する文献学的研究二八頁、三七偈。
- ㉚ ibid. 30p. 42 Verse.

- ③① ibid. 34p 53v.
 ③② ibid. 101p 57v. 2次への再註。
 ③③ ibid. 41p 68v.
 ③④ Pv. 38p 1~。
 ③⑤ Pv. 195p~, Pv-Tib 224b~, §. 1407p 5~。
 ③⑥ Pv. 128p 11.
 ③⑦ Monier Skt-English Dictionary 1276p.
 ③⑧ Pv. 191p 8『大聖』二四七〇。
 ③⑨ Ad-I 22p.
 ④① Pv. 198p, Pv-Tib 226b, §. 1411p, -2.
 ④② Pv. 198p, Pv-Tib. 226b, §. 1412p.
 ④③ Pv. 141p 2~, 2次 38p 6, 46p 3, 128p 11, 155p 15.
 ④④ Ad-I 105p, A 138p 12.
 ④⑤ 注④③参照。

二「自性の無」と「無の自性」

——abhāvasvabhāva に つ いて——

二万五千頌般若に現われる十八空とか二十空といわれる空の分類は、中阿含の『大空経』^①に内空、外空、内外空
 という分類があるから、すでに原始仏教にその萌芽のあることが知られるが、十八や二十という形でまとめられた
 のは二万五千頌般若などの拡大般若経が最初である。これらは単なる空の分類であるという見方もできるが、空を
 説く經典であるといわれる膨大な般若經典群にあつてさえ、空を組織的に説くところは比較的少なく、まして「般

若經の原型」では空とはいかなる内容のものであるかを知ることには非常に困難である。

こういう事情であるから十八空や二十空は、中でも組織的に空が説かれているものである。

この二万五千頌般若の空の分類は後に月称の『入中論』にほとんどそのまま引用されており、入中論第六現前地の骨子の一つである。

また瑜伽系の論書でも、世親は『中辺分別論』に十六空を引用しており、第一章相品における空性の説明の中心をなすに至っている。

このように二万五千頌般若などの空の分類は論を展開する上で重要視されたようである。

したがって、この空の分類を検討することは大乘仏教初期における空の内容を知る上で欠かすことができない。

pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitāsūtra (二万五千頌般若) 195~198頁にかけて二十の空性の説明がある。

他にも多く「空の分類」は挙げられているが、^④そこでは名称を示すのみで内容の説明はないので、この箇所にて、梵本、漢訳、^⑤チベット訳の比較検討を行う。漢訳は異訳諸本によって、まち／＼な訳語もあるので適当と思われるものを採用した。

(1)	adhyātmaśūnyatā	内 空	nan ston pa ŋid
(2)	bahirbhāś	外 空	phyi
(3)	adhyātmabahirbhāś	内外空	phyi nan
(4)	śūnyatāś	空 空	ston pa ŋid
(5)	mahāś	大 空	chen po
(6)	paramārthāś	第一義空	don dam pa

(7)	sarṅskṛtaś	有為空	hdus byas
(8)	asaṅskṛtaś	無為空	hdus ma byas
(9)	atyantaś	畢竟空	nthañ las h̄das pa
(10)	anavaraḡraś	無障空	thog ma dañ tha ma med pa
(11)	anavakāraś	無散空	dor ba med pa
(12)	prakṛtiś	本性空	rañ bshin
(13)	sarvadharmaś	一切法空	chos thams cad
(14)	svalakṣaṇaś	自相空	rañ gi mtshan ñid
(15)	anupalambhaś	不可得空	mi dmigs pa
	(16) 無法空 (abhāvaś) ⁽⁷⁾		dños po med pa
	(16) 有法空 (svabhāvaś) ⁽⁷⁾		ño bo ñid
(16)	abhāvasvabhāvaś	無法有法空	dños po med pañi ño bo ñid
(17)	bhāvaś	有性空	dños pos stoñ pa
(18)	abhāvaś	無法空	dños po med pas stoñ pa
(19)	svabhāvaś	自性空	rañ bshin gyis stoñ pa
(20)	parabhāvaś	他性空	gshan gyi dños pos stoñ pa

漢訳とチベット訳は、ます(1)〜(15)・(16)・(16)の順に計十八の空性を列举し、その説明に於て漢訳はそれら十八

空性を述べ、さらに四空を説明している。チベット訳は(1)～(10)の説明をし「(10・10)の説明はない」さらに漢訳同様、四空を説明している。四空を別出する点では漢訳とチベット訳は一致し、梵本のみがそれら四空をも含めて全体で二十の空性としてまとめている。

漢訳とチベット訳の別出の四空とは、梵本との内容の比較からすると(17)・(18)・(19)・(20)に相当する。

(16)と(18)・(16)と(19)はそれぞれ同一のものであるが漢訳はそれぞれ別々に説明している。

(14) *abhāvasvabhāvasūnyatā* の前後に於て、梵・漢・蔵に相違が見られることは、実は *abhāvasvabhāvasūnyatā* の意味が読み方及び内容の上から不明瞭である点に起因すると思われる。

以下この点に関して検討を加えてみる。

abhāvasvabhāvasūnyatā の説明は梵・蔵は一致する。すなわち、

nāsti sāmīyogikasya dharmasya svabhāvaḥ prāṭīyasamutpannatvāt / sāmīyogaḥ sāmīyogena śūnyah
akūṭasthāvināśitāmūtpādāya / tat kasya hetoḥ / prakitirasyaiṣa / ⑩

結合することによって生じているものの自性は存在しない。それには縁起によって生じたという性質があるから。結合は結合それ自体として空である。常住不変なものでもないし消滅するものでもないが故に。それはなぜか。それはその本性であるから。

漢訳のうち、この梵・蔵の説明に比較的近いのは『放光般若』と『光讚般若』であり、『大品』と『大般若第二会』は梵・蔵と相違が見られる。

『大品』

何等為二無法有法空。諸法中無法。諸法和合中有三自性相一。是無法有法空非、常非、滅故。何以故。性自爾。是

名「無法有法空」。⁽¹³⁾

『大般若第二會』

云何無性自性空。無性自性謂諸法無能和合者性。有_所和合自性_上。當知_下此中無性自性由_二無性自性_一空_上非常非_レ壞。何以故。本性爾故。是為_二無性自性空_一。⁽¹⁴⁾

問題となるのは⁽¹⁵⁾ abhāvasvabhāvasūnyatā (無法有法空) は⁽¹⁶⁾ abhāvasūnyatā (無法空) と⁽¹⁶⁾ svabhāvasūnyatā (有法空) との單なる合成なのか、それとも⁽¹⁶⁾ と⁽¹⁶⁾ とはまた別な空性であるのか、つまり abhāvasvabhāva とは「無法と有法」なのか、それとも「無法の有法(自性)」なのかということである。

abhāvasvabhāvasūnyatā は次のように考えることができる。

(A) 無法 (abhāva) と有法 (svabhāva) は共に空性である。⁽¹⁶⁾

(B) 無を自性とする_二この空性_一(無の自性が空性である_二この_一)

abhāvasvabhāvasūnyatā はチベット訳では⁽¹⁷⁾ *dnos po med paṅi ṅo bo ṅid ston pa ṅid* である、abhāva と svabhāva は *genitive tatpuruṣa* である、チベット訳に従う限り、それは「無の自性」となるのである、「無法 (abhāva) と有法 (svabhāva)」と_二dvandva_一 ではない。

そこで(A)・(B)のいずれがより妥当するかを知るために〔I〕 svabhāva (自性) を考察することからはじめる。次に〔II〕 abhāvasvabhāva の用例からその意味を検討する。

〔I〕

abhāvo rūpasya svabhāvaḥ⁽¹⁷⁾

色の自性は無である。

rūpasya svabhāvo nāsti, yasya svabhāvo nāsti so'bhāvaḥ⁽²⁸⁾

色には自性が存在しない。あるものについて自性が存在しない、それは無である。

yasya sāmyogikaḥ svabhāvo nāsti so'bhāvaḥ⁽²⁹⁾

あるものには結合によって生じつゝる自性は存在しない、それは無である。

yo' svabhāvaḥ so' bhāvaḥ⁽³⁰⁾

無自性であるものは、それは無い。

dharmaṇāṁ svabhāvo nāsti⁽³¹⁾

諸存在には自性がない。

abhāva eva sarvadharmāḥ⁽³²⁾

無いやあらぬものがすべて。

[H]

yadi bhagavān abhāvasvabhāvāḥ sarvadharmāḥ⁽³³⁾ (bcom ldan ḥdas gal te chos thams cad dños po

ma mchis paḥi ño bo űid lags na)⁽³⁴⁾

世尊よ、あつてゐるものなる無を自性とするなら、……

abhāvasvabhāvā prajñāpāramitā.⁽³⁵⁾

sarvadharmā abhāvasvabhāvāḥ.

般若波羅蜜多以「無性」為「自性」⁽³⁶⁾

一切法皆用「無性」為「其自性」

般若波羅蜜は無を自性とする。

すべてのものは無を自性とする。

〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕を対比した例を示そう。

世尊よ、いかにして如来応供正等覺者は、無を自性とする四禪・六神通を生じたのか、いかにして衆生と非衆生は三聚に於て記を受けたのであるか。

もしスプーティよ、欲あるいは惡あるいは不善というものに自性 (svabhava) あるいは自体 (bhaṭṭa) があるならば、あるいは他性 (parabhava) があるならば、スプーティよ、私が昔、菩薩行を実践していたとき、無を自性とする欲・惡・不善というものを知って、四禪を成就し、依止することはできなかったであらう。スプーティよ、欲・惡・不善というものには自性はなく、自体はなく、他性はない。それとは別に無の自性だけはあるが故に (anyatra-abhāvasvabhāvat eva : gshan du na dños po med pañi ño bo ñid kho na yin pas) 私は昔、菩薩行を実践しているとき欲・惡・不善というものを遠離し、有尋、有伺な、遠離した、喜樂な初禪を、同様に四禪を成就し、依止したのである。スプーティよ、もし諸神通に自体、自性、他性があるならば、スプーティよ、私は無を自性とするあらゆる神通を知って、無上にして完全なことをなすことはできないだろう。スプーティよ、すべての神通には、自体・自性・他性が存在しない。それとは別に無の自性だけは存在するから (na bhāvo na svabhāvo na parabhāvō sti, anyatra-abhāvasvabhāvat eva : dños po med de / rañ gi dños po ñaṇ / gshan gi dños po med la / gshan du na dños po med pañi ño bo ñid kho na yin pas) それ故に如来応供正等覺者は無を自性とするあらゆる神通を知って無上にして完全なことをなすたのである。^{②⑦}

あるものには結合することによって生じている自性は存在しない (sāmyogikaṃ svabhāvo nāsti) それは無い
ある。こういうふうに、すべてのものは無を自性とする (abhāvasvabhāvaṃ sarvadharmāḥ) のうにまた
すべてのものは空性を自性とする (śūnyatāsvabhāvaṃ) 無相を自性とする (animittasvabhāvaṃ) 無願を自性
とする (apraṇihitasvabhāvaṃ) 真如を自性とする (tathatāsvabhāvaṃ) 実際を自性とする (bhūtakojīsva-
bhāvaṃ) 法界を自性とする (dharmadhātusvabhāvaṃ) じつごうふうだい、すべてのものは無を自性とする
知らなければならない。^{②④}

あるものが認識されない (nopalabhyate) その理由を一方は「無を自性とする (abhāvasvabhāva)」故に^{②⑤}
他方では「自性が存在しない (svabhāvo nāsti)」ためであるとされる。これもこの例に属するであろう。

『二万八千頌般若』『二万五千頌般若』以外に『十地経』^{①⑥}「般若経」の中では後期に属するが『善勇猛般若経』^{②⑥}
も abhāvasvabhāva の用例はみられる。

以上より結論し得ることは abhāvasvabhāva (dhos po med paḥi ño bo ñid) は取りも直ち「無の自性」
を意味する。したがって abhāvasvabhāvaśūnyatā (dhos po med paḥi ño bo ñid ston pa ñid) は「無の自
性の空性」「無を自性とするこの空性」を意味すると考えられる。それが「無法 (abhāva) と有法 (svabhāva)
は共に空性である」という意味に理解し得ることは abhāvasvabhāva の用例を検討した限りでは証明されないと
思われる。

それに加えて言い得ることは「あらゆるものは空性である」こととは「あらゆるものには自性が存在しないこと」
ということもできるし「あらゆるものは無を自性とする」ということもできる。それらが別々なものではなく二に
して一なるものであることは言うまでもないであろう。それは「あらゆるものは自性が存在しないことを自性とし

て存在している」「あらゆるものは自性が存在しないという仕方 で存在している」と言いてもいいかも知れない。空性が「自性の存在しないこと」と同時に「あらゆるものの存在性を示し、あらゆるものを成立せしめること」の二にして一なる意義をもつ所以は、この点に求められるであろう。

初期の般若経とはまた時代が下るが *abhāvasvabhāva* については、世親の『中辺分別論』²⁴⁾や『三性論』²⁵⁾にもその用例を見ることが出来る。『中辺分別論』には般若経から十六空の引用があることは最初に一言したが、

「実に、二つの無と無の有とが空の相である。(dvayaḥ bhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇam) 弥勒偈一・一三」²⁶⁾に対し世親は次のように釈している。

「知られるものと知るものの二つの無と、その無の有とが空性の相である。そういふふう に空性には無を自性とする ことという相があるということが明示された (*abhāvasvabhāvalakṣaṇatvaṁ śūnyatayaḥ paridipitāṁ bhavati ; dṛṣṭo po med pañi ho bo ñid ni ston pa ñid kyi mtshan ñid du yonṣ su bstan pa yin no*) またその無の自性であるものは」

「有でもなく無でもない (弥勒偈一・一三)」²⁷⁾

世親によれば「無を自性とすること」とは知るものと知られるものの「無であること」と同時に「無の有である こと」を指し示している。

さらに、弥勒偈一・二〇に対し以下のように注釈する。

我と存在との無が空性である。またその無の有が空性である (*tada bhāvasya ca sabbhāvaḥ ; dṛṣṭo po med pa dehi dṛṣṭo po yod pa yaṇ ston pa ñid do*) ……空性の相を明示するもののために最後に二種類の空性を 設定する。すなわち無の空性 (*abhāvasūnyatā*) と無を自性とするものの空性 (*abhāvasvabhāvasūnyatā*) と

である^③

空性とは、我と存在の「無」と「無の有」である。そして「無」と「無の有」それぞれが「無の空性」であり、「無を自性とするこの空性」であるとすると。この二が「空性の相」にはかならない。世親は弥勒偈（一・二〇）の「無の有 (abhāvasya sadbhāvaḥ) という空性」に対し「無を自性とするこの空性 (abhāvasvabhāvasūnyatā)」を引いている。

入空について、これを「無と、無の有」と考えることは、中觀学派とは何ほどか異った、瑜伽行学派の独自の解釈であり、発展した解釈であると考えられる。その独自の所以、発展したという意味は、根幹的な主題である虚妄分別、あるいは「識」との、深い結びつきにおいて空が考察されていることにある^④。

といわれるように瑜伽行派の思想を背景にした世親釈と般若經の空性の説とでは、異なった事情を前提にしていることは十分察せられるし、その上、世親は abhāvasūnyatā と abhāvasvabhāvasūnyatā を他の十四の空性とは別なものとして、十四の空性の総括的な意味をもつものとして説明している。^⑤『二万五千頌般若』に於ては、その二空性が他の空性に対し、どういった位置を占めるかは、その説明からでは明らかでない。こういった相違にもかかわらず、世親が空性について abhāvasvabhāva とつたことは無論、弥勒偈の abhāvasya sadbhāvaḥ (無の有) ということも『一万八千頌』『二万五千頌般若』の abhāvasvabhāva との結びつきが認められると思われる。すなわち、世親は『般若經』からの引用を明示するものや十六空を引用したのみならず abhāvasvabhāva についても『般若經』の中で知り、それを『論』の展開の上で巧みに活用したのではなからうか。^⑥

小品系（八千頌系）から大品系（二万五千頌系）般若への変遷については、

Ⅷ 大品類は小品類の最初の一品を二十数品に増大した点と、Ⅰ大品類は小品類の終りから第三品の前に約二十品を加えた点と、この二点に相違が認められるのみで、他の部分に著しい形式上の変化はない。Vといわれている。④
小品系から大品系般若への増広発展というものには二つのものが考えられる。その一つは形態上の、いわゆる同一線上の量的増広と、他の一つは、内容上のいわゆる大品系にのみ認められる異質な質的発展とである。

この第二のものについて考えてみると、すでに指摘されたものに「浄仏国土思想」「般若経の十地」「十八空・百八昧」「陀羅尼」「六度相摂」等がある。⑤

Ⅱの増広については『大品』というならば第68品前後から第86品前後に相当する。ここに於ける『八千頌系』から『二万五千頌』『一万八千頌』への質的な発展である一波羅蜜を修習すれば他の五波羅蜜を撰するという、いわゆる六度相摂は『大品』第68品(Ad-I 90p-)に現われる。

新たに次のものをその質的発展を示すものとしてつけ加えることができる。

先の *abhāvasvabhāva* の用例を多く見るのは『大品』第75品前後である。これとほぼ軌を一にして説かれるのが、以下の問いに対する答えである。

もし、あらゆるものがそれ自体として空である (*sarvadharmāḥ svabhāvasūnyāḥ*) ならば、いかにして般若ハラミツを實踐している菩薩大士は無上にして完全なまどりをなせるのか ⑥

もし般若ハラミツ・菩提をまが認識されない (*nopalabhyate*) ならば、いかにしてあらゆるものを識別 (*pravīcaya*) するのか ⑦

もし、あらゆるものが無を自性とする (*abhāvasvabhāvaḥ sarvadharmāḥ*) ならば、如来は(それを)いかにしてなせるのであるか ⑧

もし、あらゆるものが無を自性とするのであれば、いかなる意義 (arthavaśa) を認めつつ菩薩大士は衆生たちのために無上にして完全なさとりに向って行く (sampratiṣṭhati) のか^{④⑨}

あらゆるものが区別されない (asambhinnā) 場合、いかにして、善・不善・世間・出世間・有漏・無漏・有為・無為という説明 (nirdeśa) が存在するのか^{⑤⑩}

夢の如き、非実在な (avyastuka) 無を自性とする、自相本来から空 (svaśakṣaṇaśūnya) であるあらゆるもの設定 (vyavasthāna) が、いかにして存在するのか^{⑤⑪}

深遠な般若ハラミツを実践している菩薩大士はあらゆるものが無を自性とし、究極的に空 (atyantaśūnya) であり、はじまりも終りもないという点で空 (anavaraṅgaśūnya) であるにもかかわらず、これらが善法、不善法乃至有為法、無為法であると設定する^{⑤⑫}

もし、色が本性から空 (prakṛtiśūnya) でなければ、菩薩大士は無上にして完全なさとりをさどることはできない。したがって菩薩大士はあらゆるものが本性から空であることを知って、無上にして完全なさとりをさどるのである^{⑤⑬}

般若ハラミツを実践し、あらゆるものを非実在であると見ている菩薩大士は善巧方便によって無上にして完全なさとりに向って行く^{⑤⑭}

衆生たちは諸存在が自相本来から空であると知らないの(それを)知らない彼らは五趣から解脱しない^{⑤⑮}

これは「空」であるからこそ、さどることができし、すべてのものが成立し得るし、まさに成立しているということをいっているものである。「空」とは単に「自性の無」を意味するのみならず、あらゆるものを成立させる

ものであることを知らしめている。これと同じ主張をナーガールジュナが『中論』や『廻諍論』においてなしている。^{⑤⑥}特に『中論』第24章に於けるそれとはまさしく一致する。『一万八千頌』『二万五千頌般若』では、スプーティと世尊とのやり取りであるが『中論』では有性論者に対するナーガールジュナの反駁という形式上の違いをもつだけである。

『般若経の原型』から『一万八千頌』『二万五千頌般若』へと変遷するに伴い「空」は単に、あるものの存在していない状態を意味するだけでなく「自性の無」であることを明示し、さらに「自性の無」のみならず「あらゆるものを成立させている」という意義を明瞭にしたのである。そのことによって、竜樹や世親と通じるものをもつに至ったといつてよいであろう。

「空」のこの「自性の無」と「あらゆるものを成立させている」という相反する如き意義を一体とならしめるのは、ほかでもなく「無の自性」*abhavasyabhava* の説であると考えるのである。^{⑤⑦}

- ① 『中阿含経』卷第四九・大・七三八b、MN. No. 122 *mahāsuñhātā*、赤沢智善『仏教教理の研究』四〇五頁以下に詳し。
- ② 小川一乗『空性思想の研究』三二五頁以下。
- ③ *Nāgao Bhāṣya* 24p、これが『般若経』に由来することは、長尾雅人「金剛般若経に対する無着の釈偈」(東方学会創立二十五周年記念東方学論集) 五五八頁。なお、この16空は *Ad* に相当する『大般若第三会』のそれ(大・七・四八〇b)と数・順序とが一致す。
- ④ *Pv.* 24p 10, 44p 13, 120p 18, 133p 5, 136p 2.
- ⑤ 『放光』大・八・二三a『光讚』一八九b『大品』二五〇b『大般若第二会』七三a。
- ⑥ *Pv.-Tib* Vol. 18 No. 731, 224b.

- ⑦ S. 1407p 及び Pv-Tib 224b から確認される。
- ⑧ 『放光』二三b『光讚』一九〇a『大品』二五〇c・二五一a『二会』七三c。
- ⑨ 二十空性全体については、葉阿月『唯識思想の研究』二八三頁以下に梵・漢を比較し、和訳研究がある。しかし筆者とは、般若経の abhayaśvabhāva の解釈に於て、意見を異にする。
- ⑩ Pv. 197p 19~, Pv-Tib 226b 1~ chos thams cad rten ciñ h̄brel bar h̄byuñ bañi phyir / hdus pañi no bo riñ med de / mi rtag ni h̄jig pañi phyir / hdus pa hdus pas stoñ ho / de ciñ phyir she na / deñi ran bshin de yin pañi phyir te /
- ⑪ 大・八・二三b「何等為_二有無空_一。於_二諸聚會中_一亦無_二有実_一。是為_二有無空_一。」
- ⑫ 大・八・一九〇a「彼何謂_二其無所有自然空_一者。其自然者無_二有合会_一。是謂_二其無所有自然空_一也。」
- ⑬ 大・八・二五〇c。
- ⑭ 大・七・七三c。
- ⑮ 葉阿月・前掲書三二三頁及び三五〇頁「⑩と⑪は⑫を分けて説明しているにすぎない」とする。
- ⑯ 中村元『仏教語大辞典』一三四六頁。
- ⑰ Pv. 137p 2.
- ⑱ Ad-II 5p.
- ⑲ Ad-I 162p.
- ⑳ Ad-I 129p.
- ㉑ Ad-II 6p.
- ㉒ Ad-II 1p.
- ㉓ Ad-II 8p.
- ㉔ Ad-Tib. 53b 4.
- ㉕ Pv. 141p 15~, 19~
- ㉖ 『二会』大・七・五〇c『放光』大・八・一六a『光讚』一七二a『大品』二三七c。

- ②⑦ Ad-I 200p. Ad-Tib 134p 46a~46b 『放光』 一一〇 a b 『大品』 三八四 a b 『二会』 六七・三五四 a b。
- ②⑧ Ad-I pp. 162~163 『放光』 一一五 c 『大品』 三七八 a 『二会』 三四二 a。
- ②⑨ Pv. 141p.
- ③⑩ Ad-II 2~4p.
- ③⑪ ed. R. Kondo 134p 9.
- ③⑫ ed. R. Hikata 90p 1, 10.
- ③⑬ 中村元「空の考察」(『鴻博士古稀記念論文集』 一七七頁以下・長尾雅人『世界の名著』 2 大乘仏典四七頁。
- ③⑭ 無著の『金剛般若積偈』 ed. Tucci 75p 44 Verse 2. sarve' bhavaśvalakṣaṇāḥ (あふふあふあは無を自らの相とす) となす。『じふち同内容のあふあふとなす。
- ③⑮ Nagao Bhāṣya 23p 1.
- ③⑯ Trisvabhāva 『山口益仏教学文集』 128, 132, 136p 26 verse.
- ③⑰ Nagao Bhāṣya 22p 23.
- ③⑱ ibid 23p. 山口益『漢藏对照弁中辺論』 14p 5.
- ③⑲ 「無の有」のうごひは Shīramatī の説明となす。 Madhyāntavibhagavikā ed. S. Yamaguchi pp. 46~47. 同和訳七三頁。
- ③⑳ Nagao Bhāṣya 26p. 山口益『漢藏对照弁中辺論』 21p.
- ④① 長尾雅人「金剛般若経に対する無著の積偈」五六七頁。
- ④② Nagao Bhāṣya 26p. 彼の二空性を他の十四空性とは別な空性 (anya śūnyatā) として、前者を増益 (samāropa) の、後者を損減 (apavāda) の除去のためとする。藥阿月前掲書二四七・二七八頁参照。
- ④③ Nagao Bhāṣya 18p 16l.
- ④④ ②⑧の用例となす。
- ④⑤ 山田竜城『大乘仏教成立論序説』二〇六頁。
- ④⑥ 赤沼智善『仏教経典史論』二六五~六頁。二三〇頁。
- ④⑦ Ad-I 114p. 『大品』 三六九 a。

- ④⑦ *ibid* 140p.『大品』三七四a。
- ④⑧ *ibid* 198p.『大品』三八四a。
- ④⑨ Ad-II 8p.『大品』三八六b。
- ⑤⑩ *ibid* 33p.『大品』三九二a。
- ⑤⑪ *ibid* 35p・三九二b。
- ⑤⑫ *ibid* 37p・三九二c。
- ⑤⑬ *ibid* 81p・四〇三d' 98p・四〇七d。
- ⑤⑭ *ibid* 88p・四〇四c。
- ⑤⑮ *ibid* 118p・四一一c。
- ⑤⑯ 中村元「空の考察」(前掲)一七七頁以下。
- ⑤⑰ 参照。